

## 経済学と幸福

石戸 光 (千葉大学法政経済学部教授・国際経済論)

今回頂いた論点：前回 6 月 24 日は脳科学についてのフリーマン理論の紹介を浅野先生からしていただきました。そこで出てきた一つの課題は、人間脳の生物学的な側面と心の持つ理性や情動の側面とからんだ「欲求」「欲望」の関係です。「のどが渴いて水が飲みたい」という先天的な生理的な欲望であれば水を飲めば終わりですが、現代の「金を儲けたい」という欲望は明らかに後天的であるだけでなく、近代の市場主義の発達で止めどもなく増幅しています。なぜそういう事態になるのか。フリーマンの脳理論やパンクセップの脳の情動理論からはこの「欲望」についてどのようなことが言えるのか、また「金を儲けたい」という欲望を是認し増長させる新古典派経済学のホモ・エコノミクスが持つ前提の問題点とその克服、これらについて討論します。脳科学の側面の発題を浅野孝雄先生に、経済学の側面の問題を石戸光先生に発題して頂きます。そこから要求される今日のモラル教育はどうあるべきか等々に議論を進めます。出席者は前回のフリーマンの理論の概略の理解が要求されますのでご留意下さい。

### < 報告内容の簡潔なまとめ >

合理性の限界 (Herbert Simon, Oliver Williamson, Joseph Stiglitz ほか) からの視点：「完全合理性を有しない人間は、「習慣」を含めた個人・社会における「制度形成」によって行動を決定することが思考節約的で合理的である。」

金を儲けたいという欲望：先天的な個としての「生存欲求」が後天的な貨幣への渴望へと「習慣形成」(制度化)。近代の市場主義の発達は個としての「生存欲求」を制度化したものの。→この欲望という「習慣」の形成 後天的に学習されるいわば「条件反射」で、脳機能と関連づけられるのでは？

欲望を是認し増長させる新古典派経済学のホモ・エコノミクスが持つ前提の問題点：18世紀に生きた道徳哲学者であり経済学の父としてのアダム・スミスが「しかたないこと」として「許容」した自由競争原理を「是認」あるいは「奨励」と置き換え、スミスがそもそも強調した「共感原理」を捨象したこと

その克服：幸福は「客観的」な物量によって基盤がつくられながらも、最終的には「主観的」に認識されるもの。これら双方への視点を持ち続けることが重要。→仏教思想の「足るを知る」こと、キリスト教社会事業家・賀川豊彦の提唱した「主観経済学」とも関連。

<国民総幸福量と仏教国ブータンの「豊かさ」>→資料1「国民総幸福」(Wikipedia) および拙稿『豊かさの経済を求めて：ブータン王国に思うこと』をご参照。

国民総幸福量：内面的な幸福度を主眼とした概念で、外面的な物量をもとにする「国民総生産」と対比される。

仏教国ブータンの「豊かさ方程式」：
$$\text{豊かさ} = \frac{\text{物質}}{\text{欲望}}$$

これは「ないもの」を嘆く欲望の在り方とは対照的で、「あるもの」を感謝する姿勢。

→「ポジティブ心理学」そのもの。

経済活動を通じた豊かさの実現には、「アクセル」と「ブレーキ」の双方が必要。生存欲求を基盤とした自由競争原理を「アクセル」とすると、それが「欲望の肥大化」とならないための「ブレーキ」(抑制機能)を「思想」が担っている。筋肉のエネルギーの向かうべき方向性を脳という情報機能が制御しているようなものか。人間には交感神経と副交感神経の2つが併存しており、脳機能とも何か関連があるのでは？

<現代経済学の混迷>→資料2をご参照。

物量を拡大させるための「アクセル」を強調した新古典派経済学の「ホモエコノミクス」の前提(スコットランド啓蒙主義の影響、すなわち人間の理性への全幅の信頼)。また倫理学上の naturalistic fallacy (自然主義的誤謬、自然観察のみから「良いもの」つまり価値判断を導き出してしまいう過ち)→「～べき」(ought)は自然観察(being)からは出てこない。ではどこから？→「思想・宗教」の役割。キリスト教的には、「原罪」に陥った後の人は「先天的」な欲望の歪み、また自らの完全合理性(自らを神あるいは「主権者」と錯覚する)という問題を抱えている。→資料3(旧約聖書のヨブ記を絶対的主権者および幸福との関連で考察)をご参照。また資料4(旧新約聖書にみる「新しい契約」「新しい人」と人間の倫理的合理性に関する論稿)をご参照。→認識に関わる脳内現象として、確率系と確定系の超越ゆえの一致。このことは脳波の「定常化」、すなわちアダムスミスの「幸福感」と関わりがあるのでは？

経済学の父アダム・スミスは物量の多寡よりも(「最低限の物質は必要」としたが)、心理的な「平常心」を幸福の指標として強調。→しかしこれでは客観的な統治の手法(政治)にはそぐわない。やはり客観的な指標が必要ではないか。→「物量の多寡に基礎を置くベンサム流の hedonistic calculus (快樂を計量化できるとする考え)。これはたしかに政府の財政支出の根拠ともなる重要な考え方。

アダム・スミスの倫理学と経済学は、人間が幸福になるための学問であり、スミスの言う幸福とは、平常心（穏やかな心）を持っている状態を指す。道徳哲学（倫理学）としての経済学は、人間が互いに共感原理に従って生活し、平常心を得ることをめざし、物量を重視する意味での経済学は、効率性を追求して必要最低限の富を生産し、やはり平常心を達成するための学問である。アダム・スミスは、当初からこれら2つの学問を一体的にとらえられていたように思われる。すなわち、スミスの体系は「社会の中でしか生きていけない諸個人が、自発的につくりあげる平和的共存の理論」である。

しかし後年の「弟子」たちが前者の「アクセル」のみを肥大化して強調。貧しい（経済の運航速度が低い）局面では、自由競争という「アクセル」の重要性が高く、物質的に「ブレーキ」（制御機能）の重要性が強調されることはある意味でやむを得なかったかもしれない。しかし「誰かが見ていなくても神様は見ている」（外部規範への共感、外部規範の内化）はアダム・スミスの道徳哲学の基礎であった。

しかし人間は「完全合理的」ではなかった。人間は「行動」（社会レベルでは「政策」）によるすべての帰結をあらかじめ「計算」しておくことはできない（合理性の限界）。そのため、hedonistic calculusは「神」のみが行える業であり、限定合理的な人間には不可能なはず。

18-19世紀に生きたイギリスの功利主義者ベンサム（Jeremy Bentham）：行動の帰結についての計算には、無限の合理性が前提。

資本とは過去の労働の蓄積物であり、先天的で偏った（完全合理的でない）考え方が社会化して蓄積→制度的不公正の実現。

しかし人間は限定合理的でしかなかった。→資料5（アマルティア・セン（Amartya Sen）の「合理的愚か者」、アロー（Kenneth Arrow）の「不可能性定理」、サイモン（Herbert Simon）の「限定された合理性」などについて言及。）

現代経済学者スティグリッツ（Joseph Stiglitz、情報の経済学でノーベル経済学賞受賞）は、現実には、情報の不完全性が妥当し、不均衡が一種の均衡として市場においてつねに生じている、としている。→「完全合理性を持たない人間は、限られた情報に基づいて行動するしかなく、その結果、マーケットにおける均衡点が現実には必ずしも効率性の基準さえ満足できない」ということを主張（「真の均衡」、すなわちこれ以上の変化が必要なくなる状態は、経済の歴史上いまだ実現したことがない。）

限定された合理性ゆえに、近視眼的な衝動が優先 (overshoot)。危険を察知すると人間は条件反射的に逃避 (flight) するか攻撃 (fight) する。交感神経 (アクセル) と副交感神経 (ブレーキ) のバランスを欠いており、感情の適正感も欠いている。

→ 「心の安寧」、「平常心」を主軸とした人間思想としての経済学への希求。そこにおいては、限定合理的な人間の理性からは出てこない宗教的 (啓示的) 価値観 (ought の世界) を理性的に検討した上で、なおかつ理性が及ばない場合にも受容していく必要性。

## 資料 1

# 国民総幸福量

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

移動：[案内](#)、[検索](#)

**国民総幸福量**（こくみんそうこうふくりょう、英: Gross National Happiness, GNH）または**国民総幸福感**（こくみんそうこうふくかん）とは、「国民全体の**幸福度**」を示す“**尺度**”である。

国民総幸福量は、**精神面での豊かさを「値」として**、或る国の国民の社会・文化生活を国際社会の中で評価・比較・考察することを目的としている。この目的は、[国民総生産](#)（Gross National Product, GNP）や[国内総生産](#)（GDP）との大きな違いである。つまり、GNP または GDP が、計算方法に違いはあっても、或る国の社会全体の経済的生産及び物質主義的な側面での「豊かさ」だけに注目し、その国の国民生活を数値化、つまり「金額」として表現していることを批判するものである。GNP や GDP に示される或る国の資本主義的価値が、その国の国際的貿易経済での成長指数であるのは明白だが、この数値だけが、その国や国民を、国際社会の中で評価・比較・位置付けする一般的な手段となっていることに疑問視する観点から、国民の生活を、全く別の方向から比較・評価する基準を示すものとして注目され、使用されている。

## 目次

[[非表示](#)]

- [1 歴史](#)
- [2 調査方法の概要](#)
- [3 展望](#)
- [4 脚注](#)
- [5 参考文献](#)
- [6 関連項目](#)
- [7 外部リンク](#)

## 歴史

[1972年](#)に**ブータン王国**の国王**ジグミ・シンゲ・ワンチュク**の提唱で、ブータン王国で初めて調査され、以後、国の政策に活用されている。

ブータンでは、国民一人当たりの幸福を最大化することによって社会全体の幸福を最大化することを目指すべきだとする考えから誕生したものである。現在、ブータ

ン政府は国民総幸福量の増加を政策の中心としている。政府が具体的な政策を実施し、その成果を客観的に判断するための基準にするのが主な用途で、[1990年代](#)からの急速な国際化に伴って、ブータンで当たり前であった価値観を改めてシステム化する必要があったという。

[2013年](#)現在、ブータンではGNH達成が目標として掲げられつつもいまだ実現には至っていない状態にある<sup>[1]</sup>。ブータン国立研究所が[2010年](#)に行った調査では、ブータン国民の平均幸福度は6.1で、[日本](#)の6.6を下回っている<sup>[2]</sup>。

## 調査方法の概要



### 国民総幸福量

2年ごとに聞き取り調査を実施し、人口67万人のうち、合計72項目の指標に1人あたり5時間の面談を行い、8000人のデータを集める。これを数値化して、歴年変化や地域ごとの特徴、年齢層の違いを把握する。[国内総生産](#)(GDP)が[個人消費](#)や[設備投資](#)から成り立つように、GNHは1. [心理的](#)幸福、2. [健康](#)、3. [教育](#)、4. [文化](#)、5. [環境](#)、6. [コミュニティ](#)、7. 良い[統治](#)、8. [生活](#)水準、9. 自分の時間の使い方の9つの構成要素がある。GDPで計測できない項目の代表例として、心理的幸福が挙げられる。この場合は正・負の感情（正の感情が1. [寛容](#)、2. 満足、3. 慈愛、負の感情が1. [怒り](#)、2. 不満、3. [嫉妬](#)）を心に抱いた頻度を地域別に聞き、国民の[感情](#)を示す地図を作るといふ。どの地域のどんな立場の人が怒っているか、慈愛に満ちているのか、一目でわかるという<sup>[3]</sup>。

[2005年](#)には、ブータンで初の国勢調査が行われた。アンケート項目は数百に及ぶが、中で特徴的なものは次のようなものであった。

- 【満足度】自分で幸せだと思うか、幸せになるにはどのようなことが必要か？
- 【精神面】自分自身がスピリチュアルだと思うか？お祈りや瞑想をするか？
- 【自殺について】自殺を考えたことがあるか？実行しようとしたことがあるか？

- 【環境に関する教養】身近な植物の種に関する知識、水路のメンテナンスが重要だと思うか、自分で植林をするか。
- 【Cultural literacy】地域の祭り、祭りの意味、祭りで行われるダンスや歌の意味の知識について
- 【信用感】ブータン人/近所の住人をどれだけ信用しているか？

ただし2005年の調査で用いられたアンケート項目には不備も指摘されている。例えば本調査の結果を元に、「あなたは今幸せか」という問いに対して97%が幸福と答えた、との引用がなされることがあるが、このアンケートは「非常に幸福 (very happy)」「幸福 (happy)」「非常に幸福とはいえない (not very happy)」の3択で、回答の集まりやすい中間の選択肢が偏ったものになっており、また「どちらでもない」といった選択肢が用意されていないものであった。[2010年](#)からは0-10までの11段階評価による調査に改められている。<sup>[2]</sup>

## 展望

ブータン国立研究所所長である、[カルマ・ウラ](#)はGNHについて次のように述べている。

「経済成長率が高い国や医療が高度な国、消費や所得が多い国の人々は本当に幸せだろうか。先進国でうつ病に悩む人が多いのはなぜか。地球環境を破壊しながら成長を遂げて、豊かな社会は訪れるのか。他者とのつながり、自由な時間、自然とのふれあいは人間が安心して暮らす中で欠かせない要素だ。[金融危機](#)の中、関心が一段と高まり、GNHの考えに基づく政策が欧米では浸透しつつある。GDPの巨大な幻想に気づく時が来ているのではないか<sup>[4]</sup>。」

一方、2013年現在ブータンでは若年層の失業が問題となっており、こうした現実から国内でもGNHの概念が必ずしも支持を得ているわけではない状態にある。批判に対して、GNHを考案したブータン研究センターの研究者は「GNHはブータン国民全体の目標であり、達成しようと目指しているものだ。現時点でブータンがGNHを達成したとは誰も言っていない」と述べている。<sup>[11]</sup>

本項と直接関係はないが、[中国](#)の地方政府が2011年から始まった5カ年計画で、「幸福指数」を政策目標にかかげるケースが相次いでいる。GDP偏重になるあまりに、過剰投資や貧富の格差などの社会問題を生みだしていたとの認識が広がっているため、[重慶市](#)や[北京市](#)、[広東省](#)、[貴州省](#)などが具体案を掲げている<sup>[5]</sup>。

## 脚注

1. <sup>a b</sup> “[「幸福の王国」ブータンで苦しむ若者たち](#)”. [AFPBB](#) (2013年6月26日). 2014年6月1日閲覧。
2. <sup>a b</sup> 市川正樹 (2012年9月20日). “[幸福度は役に立つか?](#)”. [大和総研](#). 2013年12月24日閲覧。

3. [日本経済新聞](#) 2010年10月18日付朝刊より
4. [日本経済新聞](#) 2010年10月18日付朝刊より
5. [日本経済新聞](#) 2011年3月8日付朝刊より

## 参考文献

- ・ 「豊かさの経済を求めて:ブータン王国に思うこと : In Search of Abundance : The Case of Bhutan's Gross National Happiness」(青木寛子、石戸光、川嶋香菜著、『千葉大学人文社会科学研究』20号、2010年) [PDF](#)

(資料1 以上)

資料2 「豊かさの経済を求めて:ブータン王国に思うこと」  
<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/irwg10/jinshaken20-03.pdf> よりダウンロード可能 (メールにPDFファイルとして添付させていただきました)

資料3 旧約聖書と「幸福」:” A Philosophical-Economic Quest for Happiness in the Old Testament: The Case of Job”  
<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/ReCPAcoe/101ishido-1.pdf> よりダウンロード可能 (メールにPDFファイルとして添付させていただきました)

資料4 旧新約聖書にみる「新しい契約」「新しい人」と、人間の倫理的合理性の意味:  
” **Ethical Implications (or God's Economy) of the New Covenant and New Man**”  
(メールにWordファイルとして添付させていただきました)

資料5 現代経済学と「幸福」:” A Public Philosophical Critique of Modern Economics”  
<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/ReCPAcoe/101ishido-2.pdf> よりダウンロード可能 (メールにPDFファイルとして添付させていただきました)